

○モミジイチゴの八重咲品 (大場秀章) Hideaki OHBA: A double petal form of *Rubus palmatus* Thunb. var. *coptophyllus* (A. Gray) O. Kuntze

花が多数の雄蕊を有するキイチゴ属では、雄蕊が花弁状に変形した八重咲き花冠が少数ながら見出されている。そのなかにはトキンイバラのように園芸的に利用されているものもある。しかし、日本産種に限ってみると、類似の花冠をもつバラ属やサクラ属と較べ、キイチゴ属での八重咲きは、限られた範囲の種にしか見出されていない。この点は注目に値する。

最近、関東、中部地方に普通に見られるモミジイチゴに八重咲きの個体があることが判明した。これを見出されたのは東京都板橋区に在住する三部勝衛氏である。八重咲き品の花はモミジイチゴの正常花と比較するとかなり大きく、直径 4.5 cm に達する。花弁の数は平均 50 個になるが、それでもすべての雄蕊が花弁状になったのではなく、花には稔性のある葯をもった多数の雄蕊と雌蕊が具わっている。果実・種子はまだ確かめることができない。しかし、この八重咲き品には園芸的な利用価値が期待され栽培化が予定されているので、ここにモミジイチゴの品種として命名記載することにした。和名にはヤエノモミジイチゴを提唱する。

Rubus palmatus Thunb. var. *coptophyllus* (A. Gray) O. Kuntze
f. **coronarius** H. Ohba, f. nov.

A typo floribus plenis majoribus cum petalis ovatis vel late ovatis numero circa 50 differt.

Hab. Japonia. Honshu. Kanagawa Pref : montibus Tanzawa, prope Inugoeji (Katue Sanbe, 5 Mai 1987, typus in TI).

Nom. Jap. Yae-no-momijichigo, nov. (東京大学 総合研究資料館)

□椎名仙卓：モースの発掘 216+VI pp. 1988. 恒和出版，東京。¥1400. 大森貝塚を発見し、発掘したモース (E. S. Moorse 1838-1925) の生涯，来日の経緯，発掘の経過，さらに「大森貝塚」と「大森介墟」の両碑の設置の経過の謎などを，資料に基づいて克明に追求したものである。揺籃の時代の日本の動物学，植物学の実情が伝わってきて興味深い。モースが最初に来日した1877 (明治10) 年から1882年にかけての，東京大学理学部生物学教室の対応や，江ノ島に設けられた日本最初の臨海実験所の様子などもうかがい知ることができる。また，松村任三，矢田部良吉も，モースの採集や研究と深いかわりをもっていたことも述べられている。長年月にわたって，丹念に資料を蒐集した成果といえる書である。なお，最後の6頁にはモース関連の事項年表がある。

(黒川 遼)